

伝統と制度改革： 19世紀後期の中国の洋務運動

郭衛東

(原文は中国語 翻訳：李鋼哲)

中英両国間の阿片（アヘン）戦争は画期的な事件であり、中華伝統の古典文明はこのときに空前の危機に直面していた。それ以前の中華文明の変化は、主に国内における諸文化の統合過程であり、外部の影響を受けるとしても、それは主に東方文明（例えば、インドの仏教、アラビアのイスラム教、唐朝時代の景教もキリスト教の異端としての東方教会）からであり、西洋文明の影響は間接的で微弱なものであった。

それ以降の中国と西洋の二大文明の衝突の下、伝統と革新はこの時代の二つの主題であった。一方では、中華伝統文明は徐々に移り変わり、その過程の中で変異や衰えが発生したが、多くの場合は中華文明の中に他の文明、とりわけ西洋文明の中身を部分的に受け入れ、吸収することにより、世界の他の文明体系と緊密に融合されていく。他方では、中華伝統文明の一部は根強く生き残り、継承されており、中華文明は依然としてその民族的特色を維持していた。

その中で、19世紀後期の洋務運動は社会形態転換の鍵となった。一般的には、洋務運動は器物（物質）面での変動の時期であり、戊戌維新時期（五・四運動前後という説もある）は文化変動の時期であり、辛亥革命時期は制度変革の時期であるといわれているが、必ずしもそうではない。3つの時期は不可分な関係として錯綜し、いずれも19世紀後半の洋務運動の中で発生し、発展してきたのである。

1、製器

1840年6月21日、英国の東方遠征軍は広州の珠江口の外までに至り、そこで阿片戦争が勃発した。中国は敗戦したがその原因は何だったのか？当時の一致した結論は「器物（訳者注：近代的な技術による製品）が劣っていること」（「器不如人」）であった。したがって、阿片戦争後、当時の先覚者たちは、国を救う第一の方略は「夷の長技を学んで夷を制す」（「師夷長技以制夷」）というものであった。所謂「長技」というのは進んだ技術のことであった。その時の中国人は中国文化や伝統制度が劣っているとの認識はなく、劣っているのは只技術領域であり、「この夷は砲火以外

には何の長技もない」¹（「該夷人除炮火以外，一无长技」）、というのが当時の中国当局と知識人の西洋文明に対する最初の認識であった。

第二次阿片戦争になると、英仏連合軍の北京攻撃に伴い、咸豊帝は逃げ出し、円明園は焼かれた。屈辱的でありながらもやむを得ない状況のなかで、朝野（官民）では「技術が劣っている」という認識が深まる一方であった。1860年代には、中華文明体系の中に西洋の物質文明（洋器）を取り入れるべきだ、という考え方は徐々に為政者たちの共通認識になりつつあった。曾國藩は西洋の砲艦を購入することが中国を破局から救うための「第一要務」と見做していた。李鴻章も「西洋人は優れた銃や砲艦を持っているが故に、我が国土の中で横行することができるのだ」²（「西人專恃其枪炮輪船之精利，故能横行于中土」）と考えていた。この先駆者達の推進により、中国歴史上で第一次近代運動と言われる洋務運動が始まるのである。

「自強」を趣旨とする洋務運動はまずは軍事から始まった。1860年代以降、中国最初の西洋武器を装備し、西洋教官を採用した陸軍として湘軍と淮軍が相次いで現われ、中国最初の近代海軍として北洋と南洋の水師が現われ、中国最初の近代兵器工場—安慶軍械所、天津機器局、山東機器局などが現われ、中国最初の近代艦船製造工場—福州船政局、江南製造局が現われ、中国最初の軍事用の近代通信施設—津滬電報線、天津電報総局等が現われた。西洋文明の取り入れと模倣は他の分野はなく兵器工業から始まった。中国近代化運動は主に軍事に牽引される形で行われ、近代化の改革も多くは軍事改革から始まり、これらはほぼ中国近代化過程の中の共通性のある現象であった。軍事改革は何時もその他の改革より一拍子早かったのだ（19世紀の洋務運動派は優先的に軍事工業を開始し、民用工業の創設は70年代以降になり、他方面の改革は毎度軍事改革により引っ張られてきた。近代的な軍事工業は大機械生産体制を必要とし、そのために民用工業の創設も行われた。また軍隊を作るにもお金を必要とし、そのためには財政改革と近代銀行体系の確立が不可欠であった。兵士の訓練にはまずは将校の訓練を必要とし、そのために近代的な軍事教育機関が設立された。また新しい軍隊を作るためには西洋から学ぶことを必要とし、そのために制度と思想の面での変化を誘発した、等々）。1860年代から90年代半ばまでの洋務運動は目に余るほどの成果をあげた。

近代の大機械工業はフルセット型の体系であり、艦船銃砲を製造するには機械を必要とし、機械を製造するには鉄鋼を必要とし、鉄鋼を生産するには石炭を必要とし、石炭採掘後には輸送を必要とした。したがって、製造業、鉄鋼業、鋳業、輸送業、動力(エンジン)業はお互いに緊密に連結されており、一つも欠かせない。中国の近代輸送体系も鉄道建設から始まったが、そのスタートは決して順調ではなかった。1873年に英国のランソン・ルイビ社は同治皇帝の結婚お祝いとして「婚礼鉄道」をお土産として造ってあげたいと申し入れたのだが、きっぱり断られた。しかし、近代文明発展の勢いは決して止められるものではなく、1878年には李鴻章が唐山開平炭鋳を開業したが、その輸送のために小規模鉄道を建設した。民衆からの憤りを恐れ、最初は馬車で牽引し、その後は小規模の機関車に変えた。1886年になってやっと軌道鉄道に拡大し、その時の軌道幅は四尺八寸半であり、それが後ほど中国鉄道軌道の基準となり、機関車が本格的に使われることになった。

甲午戦争（日清戦争）前までは、中国は天津から大沽・滦州までの鉄道を敷設し、それを関外（関

¹中国史学会主编『鴉片戦争』中国近代史資料縦刊（一）神州国光社（上海）1954年版、第122頁。

²宝璽等編『籌弁夷務始末』（同治朝）中華書局（北京）2008年版、第3476頁。

東)までに拡大し、全長は 705 里であった。印刷業における技術導入も早く、1798 年にチェコの発明家アロイス・ゼネフェルダーが発明した石版印刷術(リトグラフ)が阿片戦争の前に広州に伝わったが、そのなかで影響が大きかったのは『申報』館主の英国商人 E・マジューが中国で設立した点石齋石印局である。彼は 1884 年 5 月に上海で『点石齋画報』を設立し、その後の 20 年間石版術は中国を風靡した。西洋の石印術は中国式の木刻に比べ優れたところが多く、1883 年に黄式権は『淞南夢影録』のなかで、「西洋の石版は、平らに磨かれた鏡の如く、鏡投影方法で石の上に字を写し、その後ポンドを付け、油墨を塗り、大量の書籍が一日で出来上がり、牛の毛のように細く、犀の角のように明るい」と書いている。その石版印刷術とほぼ同時期に出現した漢字鉛印術は現代中国の印刷術と直接つながっている。石印術と鉛印術の取り入れにより、書籍や新聞などの大量印刷と高速印刷が可能になり、印刷費用は大幅に下がり、文化書籍の普及と大衆化のために良好な条件が備わった。商人が物質的な富を追求して行ったことだが、結果的には文化の急速な大衆伝播を後押しすることに繋がった。

近代的な市政建設も始められた。1867 年、「上海水龍公所」が設立されたが、これは中国での最初の都市における専門消防隊であった。1881 年には英国人が上海で水道会社を設立し、都市の人々が必要不可欠とする飲用水がさらに清潔で便利になった。1886 年に、上海では下水配管を建設し、市街地の汚水が垂れ流される状況も消え去った。1882 年には上海に最初の街灯が現われたが、「最初に設置した時は、それを聞いた中国人は怪しいことと見て、電気に当たったら危険であるという心配ばかりだったが、……後ほど見たら無害だったことが分かり、接近を禁止することを止めた」³という。この年の夏には電話(このときは英文音訳で徳律風「テレフォン」と呼んだ)も上海バンドで見られるようになった。

中国人の消費構造にも重大な変化が起こった。港を開放したら、安くて良いもの、耐用の舶来品が怒涛のような勢いで国内の伝統的な市場に流れ込んできた。1850 年に上海における外国貨物の輸入総額は 390.8 万元だったのが、1860 年には 3,667.9 万元と 9 倍以上に急増した⁴。1899 年、日本の近代中国学研究的第一人者である内藤湖南は中国の北方を旅し、北京から張家口に行く途中で南口町での所見を次のように記述している。「南口旅館には洋式の浴槽さえもあり、下手な書き方で Bathroom と英文で書かれており、また洋式の便器もそろっており、道には外国人の旅行客も多く、イギリス人の影響は無視できないことが分かるだろう」⁵。新しいものを追い求めたり、異様なものを求めたり、洋式を崇めることは時流となっており、洋貨(西洋の商品)は人々が追い求める対象とされていた。服装は人類の生活文明の変化を感知する上で、具体的で、繊細で最も表象的なもので、分かりやすい指標という特徴を持っている。中国の伝統的な服装は身の周りが広く袖が広いものだったが、徐々に体にフィットした服装、とりわけ工場労働に適した服装に徐々に入れ替わった。

都会の人々の中では、背広や洋服の影響は大きく、天津衛では、「西洋人の人力車を引っ張る子供は、半袖と半ズボン、そして頭には小さな藁の帽子を被り、口には葉巻を銜え、腕時計を巻き、胸にはバッチを付け、自ら顧みて恥じ、それでも似合わないことを恐れる」⁶というふうに当時の様子が描かれた。上海バンドのファッション派は、「女性で欠かせないものとして、先細いハイヒル

³徐珂輯『清稗類鈔』中華書局(北京)1986年版、第6038頁。

⁴張仲礼『近代上海城市研究』上海人民出版社1990年版、第108-114頁。

⁵内藤湖南・青木正二(王青訳)『兩個日本漢学家的中国紀行』光明日報出版社(北京)1999年版、第84頁。

⁶張焘『津門雜記』卷下、天津古籍出版社1986年版、第137頁。

の上等な靴一足、紫貂の手筒（マフ）一つ、ダイヤモンドまたは宝石のボタンを2～3個つけ、皮のスカーフ一つ、金縁眼鏡、髪の毛用のアクセサリ、シルクスカーフ等が流行した。一方、男性に欠かせないものとして、背広、外套、洋帽子、皮靴、手杖に花球、鼻眼鏡、多少の西洋の言葉（訳者注：外国語）等⁷が流行であった。これらの人々の飾りものは近所の都市や農村から来たものではなく、海の彼岸である欧米から来たものであり、彼らはそれにより「世界市民」というイメージを持つものだと思っていた。消費生活は徐々に封建的な等級制度の束縛を打ち破り、個性化や大衆化と西洋化を特徴としており、とりわけ西洋崇拜は近代消費の重要な基調となっていた⁸。

工業化に伴い都市化が進み、中国では最初の近代都市化の波が寄せてきた。中国の都市化レベルは急速に高まり、都市は多くの場合は政治的統治中心として各部門が縦になり、横のつながりが希薄な伝統的な形態から、経済貿易を主とするネット連結型の近代的な都市形態に変遷してきた。そして都市部による農村地域に対する経済的な支配は益々強くなり、都市を主軸にする経済現象が現れはじめた。それはつまり、農村は都市に従い、町は大都会に従い、大都会は通商港都市に従い、通商港都市は世界各ビック・マーケットに従うような状況に変貌し、中国経済は世界経済との統合の波に飲み込まれた。そして、揚子江デルタ、珠江デルタと華北地区という3つの都市群が形成されたが、その中で上海を中心とする揚子江デルタの発展が最も目覚ましかった。1843年、港を開放する前の上海の人口は約50万人で、せいぜい中規模の都市であり、南京（1852年に90万人）や杭州（阿片戦争の前は60万人）に比べ少なかったのだが、1862年には市区人口だけで300万人に急増し、一気に中国および世界における当時の特大都市となった⁹。1893年、中国には台湾と東北を除いて1779都市が形成され、都市人口は2千351万3千人に増加し、全国総人口の6%を占めるようになった¹⁰。

総じていえば、30年間の「同光新政」（訳者注：同治皇帝と光緒皇帝時期の政策）を経て、中国の国力は大幅に強化された。しかし、器物（物質）だけでの発展では物足りない。器物面での変化はその他領域の変化を導き出すことになる。中国は「器物が劣っている」だけでなく、もっと重要なのは「人が劣っている（訳者注：国民の素質が低い）」（「人不如人」）ことであり、封建的伝統の桎梏の下、人々は精神的に抑圧され、人々の才能は十分に活かされていなかった。しかし、人々の素質を一気に高めることはできず、これは決して技術の改革により解決できる問題ではなかった。中国の近代化改革は徐々に広範な方向に進まざるを得なかった。

2、文化

阿片戦争以降、西洋学は完全に東洋学を抑えることになる。その過程は緩やかだが、しかし持続的で深化する方向に進んでいた。西洋学はまずは思想的に敏感な人々の中で反響を呼び、これらの人々の身分は各々違うが、いずれも文化人であることは間違いない。所謂「学者は西洋学を学んで

⁷「西装嘆」『申报』1912年4月22日。

⁸譙珊「近代城市消費生活変遷的原因及其特点」『中華文化論壇』2001年第2期。

⁹『北華捷報』1862年2月21日および1863年3月12日。

¹⁰「米」スキナー（G.William Skinner）主編（葉光庭等訳）『中華帝国晩期的城市』中華書局（北京）2000年版、第264頁。

こそ他人に勝つことができる」¹¹というように、学士たちは当然ながら、まずは文化領域に中心をおいていたが、阿片戦争の時期および戦後の一時期において、彼らの西洋に対する認識は混沌としており、表象的になっていた。その表れとしては、まずは率先して世界を見ていた先駆者たちの自己認識の限界があった。魏源の『海国図志』にしろ、徐繼畬の『瀛環志略』や姚瑩の『康輶紀行』にしろ、これらの著述は中国人が最初に書いた西洋の概況を紹介する先駆的な書籍として貴重なものではあるが、西洋を紹介するには非常に浅くて断片的な知識に基づいたもので、外部の世界を理解する上では限界があった。これらの著述はどれも基本的に西洋学の著作から引用することにより自分の知識体系を作り挙げていた。魏源はこのような方法は「西洋的な西洋学」¹²と指摘し、主には翻訳と編集に力を入れていた。以上に見て来たように、世界を見て来た先駆者たちは、翻訳と編集の手法で書籍を作る中で、欠落や漏れや誤謬などを免れることができなかつた。

西洋文化が中国社会で大きな反響を及ぶのは「キリスト教」によるものであった。19世紀50年代前後、キリスト教の布教はまずは社会下層の文人や民衆の中で成果を挙げ、さらには社会的な暴動—太平天国運動をも引き起こした。洪秀全（1814～1864年）は、自ずと「天父」神様により「真命天子」と任命されたと自認し、自分を「太平天王大道君王全」と任命した。これらのキリストのリーダーたちは「拜上帝教」（キリスト教）を国教と定め、神を信奉することは如何なるところでも聖典であるとした。1851年年初、「拜上帝教」という西洋の宗教と中国の農民が結合した奇異な部隊により「金田蜂起」が起こされ、国名を「太平天国」と掲げたのだ。1853年3月19日、50万人の太平軍は南京を攻略し、「天京」と改称した。洪秀全のような科擧にも合格できない失敗した書生が、自分も完全には理解していない西洋の宗教を利用し、勢いに乗って清朝政府と対立する新政権を作ったのである。この政権は10年ほど続いた後、キリスト教が中国では広範な土台を持っていなかったこともあり結局は失敗した。

洋務運動派達は「西洋宗教」や「西洋政治」にはほとんど関心がなく、彼らの西洋文明に対する関心点は「西器」（西洋の物質）と「西技」（西洋の技術）の側面に過ぎなかつた。しかし、洋務運動は器物の面に止まらず、西洋学と西洋文化を取り入れることにより、中国近代の文化と教育の事業が各方面において建立され始めた。

教育分野では、中国に近代的な新学堂（学校）が西洋人により最初に設立され、1860年まで、キリスト新教は中国で50カ所以上の各種学校を設立した。カトリック教学校に関する統計データは不足しているが、新教の設立した学校よりは少なくなかつたと推測できる。中国人による新式学堂の設立は洋務運動派によるもので、3つの種類がある。一つは同文館のような語学学校で北京、杭州、上海などに設立され、外国語教育が行われた。二つ目は軍事学校であり、1866年に左宗棠が馬尾に設立した求是堂芸局、これは中国近代最初の海軍学堂であった。また1885年に李鴻章が天津で設立した最初の陸軍学堂である天津武備学堂なども中国近代の軍事教育の先駆けであった。三つ目は企業に付属されている専門的な技能トレーニングを行う簡易学堂であった。洋務運動の時期に中国政府により設立された近代的な学堂は少なくとも30カ所であった。

19世紀70年代、洋務運動派は海外への留学生を派遣し始めた。例えば、アメリカには1872～75年の間に4回に渡って120名の幼童を留学させ、陸軍からは1876年に7名をドイツに留学させて

¹¹ 劉大鵬『退想齋日記』山西人民出版社（太原）1990年版、第102頁。

¹² 魏源『海国図志』（大西洋）卷三十九（原叙）岳麓書社（長沙）1998年校注本。

おり、海軍からは 1877～85 年の間に 77 名をフランスと英国に派遣した。新聞分野では、近代最初の中国での新聞業は外国人により始められた。1822 年 9 月 12 日、カトリック教会はマカオ（澳門）で『蜜蜂華報』を創刊したが、これは中国で刊行された最初の外国語新聞であった。19 世紀の 90 年代半ばには中国に 12 種類の新聞があり、主には上海などに集中していた。新しい思想は新しい媒体を必要とし、新しい議論は新しい媒体を助長し、お互いに補完関係にあった。

科学分野：農業社会を基盤として形成された中国の伝統的知識体系は大雑把で曖昧なところに特徴がある。中国では、伝統的な 4 つの知識分類として経・史・子・集に集約され、それがすべての知識を網羅することになっている。しかし、科学の発展と知識の積み上げにより、各学科分野は近代的な労働分業により細密化、専門化を必要とし、近代的な科学体系による分類化や専門化が現われるようになった。このような分類過程はまずは西洋から始まっていた。近代以来、中国人は科学技術に対する認識の深まりにより、「門類を分けず、粗細を分別しない」（「門類不分，粗細不辨」）中国の伝統的な古い学問体系では新しい学問の発展は受け入れられず、新しい学問に適応できないことを深く感じるようになった。西洋の学問体系を基に中国の学問を再構築することは避けて通れない状況になっていた。

1862 年に設立された「京師同文館」は、1867 年にはカリキュラム設定において英語、フランス語、ロシア語などの語学以外にも、算数、化学、万国公法、医学生理、天文、外国歴史地理などの科目を設置するようになった。

生物学：1858 年には、『植物学』(Elements of Botany)が出版されたが、その原本は英国の植物学者リンドレー(John Lindley)の著作であり、中国に来ていた英国の教師ウイリアムソン(Alexander Williamson)と中国近代の著名な科学者の李善蘭(1811-82 年)により共同翻訳して出版されたものである。この本は、初めて中国人に対して顕微鏡による植物細胞の発見が可能である学説を示し、また近代の実験に基づいて構築された植物体各器官の生理的な機能に関する理論を示し、地球上の緯度の違いにより異なる植物分布の状況および近代植物分類学を紹介した。その中で、『植物学』(botany)と植物分類単位としての「科」(family)という単語はこの本により初めて作り出された¹³。

化学：18 世紀末から 19 世紀の初頭に、元素論と原子論という二つの近代化学の礎石が現われ、19 世紀後半には、西洋では無機化学、分析化学、有機化学と物理化学など 4 大化学分野を構築し、近代化学の基礎が形成された。1867 年京師同文館では化学の講義が最初に行われ、1880 年には上海格致書院では中国の科学者徐寿と宣教師の傅蘭雅が共同で翻訳出版した『化学鑑原』等の書籍が教材に使われ、化学知識の講義が行われ、化学の演習も行われた。徐寿はまた初めてヨウ素、バリウム、マンガン等 24 の化学元素名称を翻訳した。

医学：西洋医学の中国への取り入れは明朝と清朝の境にイエズス会の宣教師たちにより行われはじめ、その後も続いた。

地学：地学の研究は中国で長い伝統を持っているが、同時に西洋学と交流した最初の学科でもあった。しかし、それはまだ伝統的な意味での地学であり、かつ主に地学の二つの分類である地理学と地質学分野の前段階での研究にとどまっていた。1872 年、中国近代初期の科学者である華蘅芳が

¹³ 汪子春「我国伝播近代植物学知識的第一部訳著」『自然科学史研究』1984 年第 1 期、第 90-96 頁。

2冊の書籍を翻訳出版したが、それは中国地学分野での先駆的な書籍であった。ライアルの『地質学綱要』（『地学浅釋』という中国語で出版）とアメリカ人のダナー(J.D.Dana)の『鉱物手冊（ハンドブック）』であった。1896年、鄒代鈞等は武昌で中国最初の地理学研究機関として訳印西文地図公会を設立した。その規約には、「天下の地学に志がある者は、誰もが入社して共に切磋できる」¹⁴と書いてある。

以上で見てきたように、洋務運動が展開されるなかで、自然科学と社会科学の各分野の学科が大量に「移植」されただけでなく、それはまた中国固有の学科に対する改造と再構築を引き出し、中国の文化に対する自覚的な反省と所謂「道は逆の求めにあり」¹⁵(「道在反求」)という境界にまで到達した。さらに重要なのは、それらの「西学」（西洋学問）が有機的に系統的に「中学」（中国の学問）に溶け込むことになり、新しい学問として西洋でもなく中国でもない、また中国でもあり西洋でもある「新学」というのが作り出された。中国と西洋の学術が初めて一つの新しい学術フレーム・ワークの中に統合されたのである。

3、制度

憲政制度：中国人の近代西洋政体に対する最初の理解は3つの部分、つまり国会制度、憲法体系、責任内閣であり、総じていえば憲政思想である。一つ興味深い現象は、中国の近代西洋憲政思想に対する紹介はパッケージとして総体的に行われているのではなく、内容においては前後があり、時間的にも同時的なものではないことである。最初に中国で伝播されたのは国会思想である。19世紀40年代、林則徐編著の『四洲志』と魏源の『海国図志』が最初に注目したのは西洋の議会制度であった。その中で英国国会に対しては、「国の重要なことに対しては、国王および官民が議会（Parliament）にて会議をする」と紹介されている。アメリカ国会に対する紹介は最も詳しい。「議院（Congress）を設立して国の法令を司るが、それは二つに分かれている。一つは参議院(Senate)で、もう一つは衆議院(House of Representatives)という。経済貿易、課税徴税、法律訴訟、軍事的な重要な事項はすべて両院を通過したてから施行しなければならない」¹⁶。

洋務運動の時期になると、議会思想はさらに広く伝播した。1884年、朝野の一般的な宣伝のみならず、官僚が朝廷に直接上訴し建議することさえも現れた。この年に、崔国因により編集された議院設立に関する建議が朝廷に上訴された¹⁷。最もインパクトがあったのは両広（訳者注：広東と広西）総督の張樹声による議院設立に関する建議（遺書）であった。興味深いことは、議会と憲法という西方政治制度においては一体化しているものが、中国では分離されて認識されたことである。議会思想が率先して導入されたこととは対照的に、憲法思想の導入は多少遅れているのである。中国人の憲政思想に対する理解は議会制度から始まったが、それに反して、憲法に対する認識が欠如した。その理由は、議院というものは具体的で実物であり、分かりやすい一方、憲政というのは抽象的で認識し難いものであるからである。さらに重要なのは、憲法は議会に比べて君主に対して根本的に法的制約という要素があり、また憲法は「主権在民」、「法律の前では人々は平等」、「憲

¹⁴ 張静蘆『中国近代出版史料』（二編）群聯出版社（上海）1954年版、第76頁。

¹⁵ 中国史学会主編『戊戌变法』（中国近代史資料縦刊）（一）上海人民出版社2000年版、第30頁。

¹⁶ 魏源『海国図志』卷六十。

¹⁷ 孔祥吉「清廷關於設立議院的最早争論」『光明日報』1988年8月24日。

法至上」、「制憲」、「違憲」などを持って、法律化、制度化、神聖化を強調しているのが、専制政体が強固な時代では伝播し難いものであった。研究によると、1895年前にすでに憲法問題を取り挙げることはほとんどなかったという。中国で最初にこの問題を提起した人は早期啓蒙思想家の鄭観応と言われており、彼は1895年に『与陳次亮（陳炯）部郎書』の中で「国会を開設し、憲法を定める」ことを救国の方略として提案したという¹⁸。同時期に提案された『治安五策』の最後のページでも「憲法制定」と書かれている。その中で、「議院設立はさることながら憲法も制定しなければならない」、「憲法がないと専制が厳しくなり、官吏の権力が大きいと民が無権力になり、それでは国政を議論することはできず、上下に隔たりが生じ民心が散らばる」¹⁹、と繰り返し強調した。

軍事制度：大まかに言えば、清朝の軍事は三つの段階に分けることができる。咸豊以前の八旗・緑營があり、同年間の湘軍・淮軍があり、そして甲午年とりわけ庚子年以降に設立した新軍がある。第二、三段階は中国近代の軍事制度の最初の確立期である。

財政制度：清朝の財政体制は、順治時代に最初に確立し、雍正時代に完備するが、全体的には戒律が厳しく、解協饗制度（訳者注：省庁間で税収を調整すること）を中核とした制度であった。しかし、19世紀40年代以降は、このような静態的で固定化した財政体系は、常に変動する時局に対応できず、硬直化した収入体系と動的な支出体系の間には益々齟齬が広がることになっていた。まずは、鴉片戦争など一連の対外戦争の支出および戦後の条約賠償により、清朝の財政には未曾有の予算外支出が増え、さらに太平天国の発生により、もともと重要な財源の地域であったところが太平軍に占領されたため、解協饗制度は全面的に乱れてしまったのである。大規模な戦争により国庫が枯渇し、雍正年間には中央金庫に6、7千万両の銀備蓄があったが、咸豊三年六月十二日（1853年7月17日）になると、財政部には支出できる銀備蓄はわずか22.7万両あまりで、国家財政は「今まで見たことがない窮乏化状況に陥ってしまった」²⁰。

国家財政の崩壊を防ぐためには、収入を増やし支出を減らす方法しかなく、一連の新財源開拓が洋務運動の前後に相次いで行われた。その中で重要な項目は、厘金（訳者注：商品の地方通過税）は徐々に地代に次ぐ第二税収源になり、関税は第三税収源になり、また外債、公債、および官業としての洋務企業の利益による税収源もあった。その中で、厘金以外の各収入源は近代的な税源の形に近づいていた。「これは我が国の経済史上で大きなターニング・ポイントであるといわざるを得ない」²¹。これらの変化は中国で長い間続いていた封建財政体制が徐々に近代財政体制へと転換し始めてきたことを物語っている。

行政制度：清朝の行政体制の変動は、まずは外人と密接に接触する部署から始まる。1850年代に中国は近代的な海関（税関）制度を初歩的に確立したが、残念ながら外人により操られ、所謂「洋関」（訳者注：西洋人の税関）に過ぎなかった。1860年、清朝は「総理衙門」を設立したが、これは洋務運動の開始を意味し、大きな意義を持つ。『清会典』ではこの機構の職務範囲を次のように確定した。「各国との条約を管轄し、朝廷の徳と信を明らかに示し、大凡の水陸入出に対する課税を管理し、船と車の航行を管理し、書籍の出版の管理、貨幣の管理、外国との国境の管理、文書や

¹⁸ 『鄭観応集』上海古籍出版社1988年版、第360頁。

¹⁹ 侯宜杰「関于首倡君主立憲者之我見」『文史哲』1889年第5期、第50-53頁。

²⁰ 中国人民銀行参事室史料組『中国近代貨幣史資料』第1輯上册、中華書局（北京）1964年版、第176頁。

²¹ 黄浚『花随人圣庵摭憶』上海古籍出版社1983年影印本、第367-368頁。

翻訳による伝達（メディア）の管理、国民教育の管理など」を決めていた。中国の官僚機構の近代化は対外交渉機構からスタートしたが、その理由を考えると興味深いところがある。

総じていえば、洋務運動などにより醸成されたこうした変化を経て、1911年に、中国ではやっと制度文明が転換する大革命－辛亥革命が起こった。辛亥革命の勃発は260年間余り中国を支配した清王朝の終焉を宣告しただけではなく、中国で2千年以上続いた封建君主専制制度の根本的な転覆を宣告した。近代制度文明の産物として憲法、国会、民国などが中国の地で初めて定着し、それ以来、「共和」は中国人民の確固たる正統な政治体制になり、中国の政治制度は近代文明制度への転換において決定的な一歩を踏み出した。